

本日の学び テーマ:「ニネベの悔い改め」 テキスト:ヨナ書3章1-10節

【理解の手がかりとして】

本課はヨナ書の起承転結の「転」の部分である。「主の言葉が再びヨナに臨んだ」(3:1)とある。これは「起」の部分の「主の言葉がアミタイの子ヨナに臨んだ」(1:1)と殆ど同じ。ただ今回は「再び」であり、先立つ「救いは、主にこそある」(2:10)の信仰表明が前提となっている。——復活のイエス様が、裏切ったペトロに、わたしの羊を養えと命じる場面を想起させる(ヨハネ 21:17)。

最初ヨナはその召しから逃げた。しかし今回は主の言葉どおりにニネベに行く。ニネベの町は大きく、一巡するのに三日かかる南北 5 キロで人口「十二万人以上」(4:11)であった。

ヨナは告げる。「あと四十日すれば、ニネベの町は滅びる」(3:4)と。ちなみに、聖書においては数字は特別な意味が込められている。以下に聖書の特別な数字の「3」「7」「12」そして「40」について解説すると・・・

「3」は「完全に」とか「徹底的に」という意味を表すことがあり、今ヨナ書においてもヨナが「三日三晩」(2:1) 魚の腹の中にいたとされており、それは文字通りの期間を越えた深い意味を持つ。使徒ペトロはイエス様を三度(完全に)否認し、復活したイエス様はそのペテロを三度(完全に)赦して、使徒職を回復させた(前述)。

「7」は、聖書全体で最も重要な数字の一つであり、典型的な完全数で、完成や実現を表している。創造主は7日目に天地創造の業を終えて休み、第7日を聖別した。初代キリスト教会が最初に選んだ執事は7人であったし、ヨハネの黙示録では、7つの教会に手紙が送られ、7つの封印、7つのラッパ、7つの鉢が登場する。

「12」は、神の選びや、神の民と統治に関係する。神が選んだイスラエルは 12 部族、キリスト教会の礎としてイエス・キリストが選んだ使徒は 12 人であった。ヨハネの黙示録では、新しいエルサレムにイスラエル 12 部族の名が記された 12 の門とキリストの 12 使徒の名が書かれた 12 の土台がある。

そして「40」は、神の救いの歴史において新しい展開が起こるときに使用されている。ノアの箱舟の出来事で、洪水で雨が降り続いた期間は 40 日であった。十戒の石板を受け取るために、モーセがシナイ山で過ごした期間は 40 日。約束の地カナンに 12 人の斥候が送られたのは 40 日間。イスラエルの民は 40 年間、荒野をさまよった。そしてイエス様がサタンから誘惑を受けるために荒野にいた期間も 40 日。復活したイエス様は弟子たちと 40 日一緒に過ごし、神の国について語った。ここでは、「あと四十日すれば」とあるわけだが、まさに「神の救いの歴史において新しい展開が起こる」のヨナ書の展開である。

「ニネベの都は滅びる」(3:4)を読んで想起するのは、創世記のソドムとゴモラの話。そこでは「主はソドムとゴモラの上に天から、主のもとから硫黄の火を降らせ、これらの町と低地一帯を、町の全住民、地の草木もろとも滅ぼした」(創世記 19:24-25)とあり、ニネベとは異なる結果をむかえる。そこでは「悔い改め」が起こらなかったからか。しかしその物語の中でも「神はアブラハムを御心に留め、ロトを破滅のただ中から救い出された」(同 19:29)

とあり、神の裁きの中でも救われるものがあることが示される。これはそれに先立つノア物語でも顕著である。

このように聖書は、人間の罪（悪）と、それに対する神の怒り（裁き）、そのただ中での救い、そして再生といったテーマについて繰り返し語っている。

その物語の中で、神の言葉を伝える者の働きは重要で、ここではヨナがその役割を担う。彼は「一日分の距離を歩きながら叫び」（3:4）とあるように、また二ネベの全域を行き巡ったわけではなかったが、その「神の裁き」の宣教は第一日にして驚くべき効果をあらわす。

まず二ネベの人々の反応である。人々は船乗りたちのように（1:16）神を信じ、それを具体的に表現する（3:5）。身に粗布をまとうのは、嘆き・悔い改めの表現である。次いで王がそれに続き、王の行動は「断食の布告」にまで及ぶ（3:7）。断食は「食事を断って祈り悔い改める行為」（聖書教育）であり、この「粗布」とか「断食」行為は、質素な出で立ちで荒野で悔い改めを呼びかけたバプテスマのヨハネ、そして「四十日間、昼も夜も断食した」（マタイ 4:2）イエス様の行為を想起させる。イエス様の公生涯の呼びかけはこうである。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」（マルコ 1:15）。

神は二ネベの悔い改めを見て思い直す。救いを求めて「悪の道を離れたこと」（3:10）故である。このように民への裁きを神が思い直す例は出エジプト記 32 章が有名。「主は御自身の民にくだす、と告げられた災いを思い直された」（出エジプト 32:14）——有名な「金の子牛」の出来事の結末である。ここではモーセが神へ赦しを乞う（なだめる）のであったが、ヨナの場合は、ずいぶん趣が異なる。※イエス様の十字架上での祈り「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」（ルカ 23:34）も参照のこと。

果たして、ヨナは自ら神の憐れみによって救出された者（2 章）として、二ネベの救出を喜ぶことが出来るか、・・・こうした問題を残しつつ、起承転結の「結」たる 4 章へと物語は移っていく。

（聖書教育より）

「ここには、預言者の警告になかなか耳をかさなかったイスラエルの民に対する批判が込められているのかもしれませんが・・・主は、異邦人であっても、神に背を向けて悪の中にある人であっても、悔い改めるならば怒りをおさめ、災いを思い直す神なのです。」（聖書の学び～思い直す神）